

ディケンズと貧民学校 ——社会活動家と作家の狭間で——

青 木 健

要点

1. 貧民学校運動とディケンズのかかわり
2. 貧民学校探訪記の比較
3. 公的補助要求の行方。ラッセル及びシャトルワースとの関係
4. 貧民学校における宗教教育とディケンズの姿勢
5. フィクションにおける貧民学校—『我らが共通の友』

ディケンズは、ほとんどの作品においてさまざまな形での学校・教師・生徒を描いたが、多くは有料の寄宿学校（男子校・女子校）の教師と生徒についてである。ディケンズが描いた寄宿学校の教師像は、概ね否定的である。『ニコラス・ニクルビー』のスキアーズ、『デイヴィッド・コパーフィールド』のクリークルなど悪辣な教師のみならず、『ドンビー父子』のプリンバー博士や『デイヴィッド』のストロング博士など邪悪とは思えない教師もディケンズの批判を浴びている。彼らは、教師としての正式な訓練も、教授法などの専門的な知識もないまま学校経営に携わっている。しかし、『辛い世』と『我らが共通の友』で描かれた教師たちは、時代的背景及びその描写から明らかに教師としての専門的訓練を受けた人物たちである。彼らもまた、ディケンズの批判を受けている。

一方、さまざまな学校・教師・生徒を描いたディケンズは、現実社会に

おいてどのような関心を教育に抱いたのであろうか。彼が強い関心を寄せ、積極的に関与したものに「貧民学校」(‘ragged schools’)がある。ディケンズが、直接取材をして、それを作品に反映させたものに、『ニコラス・ニクルビー』におけるヨークシャーの寄宿学校がある。『辛い世』でも、師範学校に関する資料集めをしている。しかし、それらは小説のための取材であり、一時的な行動と捉えることができる。貧民学校の場合、彼は現実にそこを訪問しただけでなく、自ら編集する週刊誌にその実情を克明に描写するとともに、自己の見解を繰り返し発表した。さらには、貧民学校のために、個人的なつながりの中で著名な慈善家に寄付を求めたり、政府へ補助を求めて請願まで企てた。そして、貧民学校について小説(『我らが共通の友』)の中で描写もしている。貧民学校問題は、ディケンズの作家人生の中でも継続性のある問題であったと捉えることができる。

本稿は、貧民学校問題にディケンズがどのようにかわり、その社会活動家の一面をどのようにみせたか、また創作の面でそれがどのように反映されたかを主として書簡と雑誌記事とから探り、ディケンズにおける社会活動家と作家との関連を見ようとするものである。

貧民学校とはそもそもどのような学校をいうのであろうか。ディケンズは、自ら編集していた *The Daily News* の中で、現実の貧民学校を次のように述べている。授業料は「無料で」(‘gratuitous’)、生徒は「子供でも大人でも」(‘children or adults’) よい。彼らは「ぼろをまとい、惨めで、汚い、見捨てられ」(‘ragged, wretched, filthy, and forlorn’)、チャリティ・スクールへも行けない、教会へも入れない、行くところのない貧しい者たちだ。「教えたいと思う人たちが生徒たちに何かを教えている」(‘willing to teach them something’)。彼らは「同情を示し、法律という鉄の手ではない援助の手を延ばし、彼らの更生をはかっている」(‘show them some sympathy, and stretch a hand out, which is not the iron hand of Law, for

their correction.」¹。少なくとも、ディケンズの意識には貧民学校が以上のように捉えられており、確かにその一面を伝えている。

一方、フォースターは、1843年におけるディケンズの活動を記述する中で、貧民学校への彼の関心が高まったと述べた後で、「[貧民学校の始まりは] ウィンザーの煙突掃除夫とポーツマスの靴製造者に始まる」²とその由来を語っている。しかし、コリンズ博士によれば、貧民学校は「1800年頃からロンドンを始め地方都市で、自然発生的に誕生した。目的は、最下層の子供たちに善良な非聖職者によって宗教教育を施すことにあった」³という。

ディケンズがこの問題でクーツ女史 (Baroness Angela Burdett-Coutts, 1823-1902) に宛てた有名な書簡は1843年9月24日付だが、同年の2月18日には *The Times* に貧民学校への寄付を求める広告が出ている。それは、Field-Lane Sabbath Ragged Schoolの財務担当者 S. R. Starey なる人物の企画とされており、彼はさらに貴族、著名人に個人的な寄付を要請した。その結果、シャフツベリ卿 (Lord Shaftesbury, 1801-85) を始め多くの貴族、著名人がそれに応じ、後にはヴィクトリア女王やアルバート公も寄付者として名を連ねた。有志の間で「貧民学校連合」(‘Union’) も結成され、成立後5年の間に「一大社会運動になった」とシャフツベリ卿に言わしめるほどにこの制度は盛り上がりを見せた。「この制度は1872年まで続き、延べ30万の子供たちがこの種の学校で何らかの教育を受け、その三分の一の者がまともな生活手段を得ている」⁴。

ディケンズが、貧民学校問題に関心を抱いた真の理由を突き止めることは推測の域をでないとしても、いくつかの証言を得ることはできる。フォースターは、1843年10月にマンチェスターで開催された文芸研究会発足会でのディケンズの演説に1つの解答を読み取っている。「ごく貧しい人々の教育という、常に彼が深い関心を抱いていた問題について……語っ

た。彼は学問の生齧りは危険だという説に反対し、ごくごく僅かな学問でも絶無に勝ることを力説して、……ささやかな知識が最下層の極貧の人々に与えた、慰藉と祝福とは言葉に尽くせぬものがあると訴えた。……[それは、ディケンズが] 貧民学校制度を歓迎したのと同じ気持ちの現われだった』⁵と述べている。ディケンズ賛歌の伝記作者の意見を鵜呑みにする必要はないが、ディケンズの姿勢の一面を伝えているといえよう。

コリンズ博士は、貧民学校が建設された地域 (Field-Lane) が、Saffron Hill や St. Giles's などディケンズの初期の作品の背景にあったこと、'ignorance' と 'crime'、そして学ぶチャンスを与えられない子どもに対する虐待というディケンズのテーマに沿ったものであったことをあげている⁶。

上記の見解を踏まえた上で、さらにイギリスにおける公教育 (national education あるいは public education) に対するディケンズの関心の強さを示唆することを加えたい。彼は Westminster Ragged Dormitory (図1) の状況を伝える 1851年4月5日の *Household Words* (以下 HW) の記事の

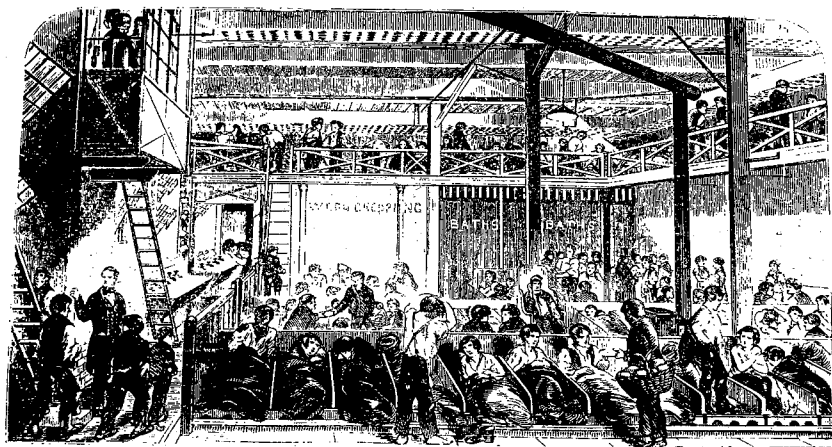


図1 Dormitory of the Field Lane Institute, from *The Ragged School Union Magazine*, vol. 4, 1852

中で、「国民教育のあり様がこのような状況では屈辱的だ」(‘... [to] leave the question of the National Education in its present shameful state, would be to maintain a cruel absurdity....’) ⁷と嘆いて見せた。その失望感
は、1843年から突然のように彼が示した「貧民学校」(ragged school) への積極的なかわりと無関係ではないだろう。

そのかわりは、1843年と1846年に集中し、後には *HW* や *All the Year Round* (以下 *AYR*) の記事の中に繰り返し現れている。そして、最終的には『我らが共通の友』においてフィクションの世界でこの問題は扱われることになる。ディケンズは1852年3月13日号の *HW* に “A Sleep to Startle Us” と題する記事を掲載し、その中で、「West Street, Saffron Hill の怪しげな区域で初めて貧民学校を目にした」と書いて、最初に訪問した貧民学校の状況を詳しく報告し、すさまじいばかりの学校環境と貧弱な授業の様子を伝えている。それは、否定的な展望のない報告であり、彼の失望を強く表しているが、1843年の時点では、彼の情熱は激しく、各方面に「貧民学校」建設と改善のための援助を求める姿を見ることができる。慈善家として著名であったクーツ女史への協力要請が成功したのは、彼の熱意の表れといってよい。次の書簡は、1843年9月16日付けのクーツ女史に貧民学校 (Field-Lane Ragged School) 訪問の体験を詳細に語り、経済的協力を求めたものであって、後に *The Daily News* に掲載し、ジョン・ラッセル (John Russell, 1792-1878) の関心を引いた記事 (“Crime and Education”) の元になるものであり、さらにその6年後に書かれた “A Sleep to Startle Us” の内容とも一致している。また、『我らが共通の友』でチャーリー・ヘクサムが一時通うことになる貧民学校の原型とも言えるものなので、ディケンズの体験がいかなるものなのか検証してみる。まず、学校の建物が次のように述べられている。

... an awful sight it is. I blush to quote *Oliver Twist* for an authority, but it stands on that ground, and is precisely such a place as the Jew lived in. The school is held in three most wretched rooms on the first floor of a rotten house; every plank, and timber, and brick, and lath, and piece of plaster in which, shakes as you walk. One room is devoted to the girls: two to the boys.... I have never seen ... anything so shocking as the dire neglect of soul and body exhibited in these children.⁸

悲惨で劣悪この上もない建物は『オリヴァー』を引き合いに出すのも恥ずかしい……ユダヤ人 [フェイギン] が住んだような場所」と冗談を言って女史の微苦笑を誘いつつ、その惨めさを暗示する。そのような建物の中で、児童たちは「この上ない悲惨と無知の中にいる」(‘in the prodigious misery and ignorance’) と続いている。彼らの存在こそ犯罪の温床とするのは、為政者や教養人でなくとも口にする当時の常識であり、ディケンズの専売ではないが、ディケンズは『クリスマス・キャロル』での ‘Want and Ignorance’ を通してそれを不朽のものにしている。そのような教室ではどのような授業が行われているのか。ディケンズはさらに次のように授業風景を描写している。

The Masters are extremely quiet, honest, good men.... They are well-grounded in The Scotch—the Glasgow—system of elementary instruction, which is excellent one; and they try to reach the boys by kindness. To gain their attention in any way, is a difficulty, quite gigantic. To impress them, even with the idea of God, when their own condition is so desolate, becomes a monstrous task.... And here

it is that the viciousness of insisting on creeds and forms in educating such miserable beings, is most apparent.⁹

グラスゴー方式¹⁰に則って教授しようとする善意の教師とそれに反応しない生徒の間のギャップは大きく、とりわけ宗教教育においてそれは著しい。「荒廃した状況の中では、神の観念を伝えることでさえ、途方もない仕事であり、……教理問答、外的な目に見える〔宗教的〕印、内的で精神的な〔神の〕恩寵等を彼らに話すことは、ベドラム精神病院の患者でさえ行わない」非常識な行為だとする。ディケンズは、ただ機械的で理解を度外視した教育を槍玉にあげる。

上記の書簡は、クーツ女史への寄附要請が主目的であり、描写においても比較的穏やかな姿勢を崩さないが、書簡の形を取って書かれた1846年2月4日の*The Daily News*の記事は、貧民学校に関する読者への訴えに始まり、「少年犯罪者更生の第一歩としての貧民学校の必要性」を強調して、貧民学校への協力を読者に訴えた後、あらためて最初の訪問を記述する。それはクーツ女史への書簡におけるより一層克明に描写されており、ディケンズの苛立ちを見ることが出来る。教室の劣悪さはクーツ女史への書簡にあったと同様だが、生徒の授業態度の悪さとともに、彼らの出自が明らかにされる。

The close, low, chamber at the back, in which the boys were crowded, was so foul and stifling as to be, at first, almost insupportable. But its moral aspect was so far worse than its physical, that this was soon forgotten. Huddled together on a bench about the room, and shown out by some flaring candles stuck against the walls, were a crowd of boys, varying from mere infants to young men; sellers of

fruits herbs, lucifer-matches, flints; sleepers under the bridges; young thieves and beggars—with nothing natural to youth about them: with nothing frank, ingenuous, or pleasant in their faces; low-browed, vicious, cunning, wicked; abandoned of all help but this; speeding downward to destruction; and *Unutterably Ignorant*.¹¹

生徒たちの年齢はまちまちで、多くは既に社会の波の洗礼を受けている。クルックシャンクの *Ragged School* と題する絵（図2）はこの状態を克明に写している。コリンズ博士は、これらの生徒たちの状況を「ジョーの世界」と呼び、『荒涼館』の道路清掃少年Joの生活環境と同一視している。彼らは、Jo同様に僅かな収入のもとでその日暮らしを余儀なくされている。中には既に犯罪に手を染めている者もいる。彼らに共通するのは「言しようのない無知」（‘Unutterably Ignorance’）であるとして、絶望的な声をあげる。



図2 *The Ragged School*, drawn by George Cruikshank about 1843–4
(In West Street [late Chick Lane], Smithfield)

我々が注目したいのは、クーツ女史への書簡にあったのと同様、宗教教育に関する批判である。

I have no desire to praise the system pursued in the Ragged Schools: which is necessarily very imperfect, if indeed there be one. So far as I have any means of judging of what is taught there, I should individually object to it, as not being sufficiently secular, and as presenting too many religious mysteries and difficulties, to minds not sufficiently prepared for their reception.¹²

クーツ女史への書簡にはグラスゴー方式による教授法を「よし」(‘excellent’) とする姿勢を見せていたが、ここでは、「システム (教授法)」に対して反対している。とりわけ宗教教育については断固反対の姿勢である。教授される内容が「あまり世俗的でなく、謎めいた難解な宗教上の事柄であり、レベルに達していない生徒たちには理解不可能だから」と理由を明かにする。宗教授業に関する同様の内容はフォースター宛の書簡にも散見され、宗教の秘儀や難解な信条等はこの貧しい生徒たちの救いと縁遠いという見解は一貫している。

宗教問題に対するディケンズの姿勢と、次に言及する政府への請願とが関連しているとするのは少々勇気がいるが、あえてその点を論じてみたい。あらゆることに手を抜かないディケンズの性格上の一徹さは、この問題でも例外ではない。貧民学校に対するディケンズのボルテージは一層上がり、読者への呼びかけに収まらず、政府への請願という形をとったことにそれは現れている。彼は、さらに続けて述べている。

The new exposition I found in this Ragged School of the frightful

neglect by the State ... and finally impelled me to an endeavor to bring these Institutions under the notice of the Government; with some faint hope that the vastness of the question would supersede the Theology of the schools, and that the Bench of the Bishops might adjust the latter question, after some small grant had been conceded. I made the attempt: and have heard no more of the subject, from that hour.¹³

コリンズ博士によると、ディケンズが公的補助を求めて請願した先は、公的には枢密院教育委員会 (the Committee of Council on Education) であったという¹⁴。この委員会は後述するように、1839年4月にヴィクトリア女王の勅令によって立ち上げられ、国庫補助による国立教員養成学校 (国立師範学校)・視学官制度・新たな方式による宗教教育等による国民教育の確立を目指したものである。しかし、各宗派の強力な反対により一旦挫折の憂き目を見る。この教育改革に指導的役割を果たしたのはジョン・ラッセル卿であり、教育局長として実質的に改革案を練ったのはケイ・シャトルワース (Key-Shuttleworth, 1804-77) であった。彼らの努力により一旦断念された国立師範学校制度は1846年に議決され、それまで宗教団体に多くを頼っていたイギリス民衆教育を国家が先導するきっかけとなり、フォースター法と通称される1870年の「初等教育法」へとつながることになる。

コリンズ博士によれば、この時 (1843年) ディケンズに政府へのアプローチを提案したのはS. R. Stareyであるが、理由はディケンズが当時既に影響力のある人物と看做されていたからだという。ディケンズはその提案にすぐ乗り、枢密院教育委員会に貧民学校への補助金支出を打診した。[[ディケンズは] 問題の大きさから、学校における宗教問題は解決される

だろう、そして小額だが補助金が承認された後、[上院に議席を持つ] 主教の方々がそれをうまくまとめてくれるだろうというかすかな期待を持って請願を試みた。しかし、それ以来、この件に関する事は一切政府から聞くことはなかった」¹⁵。

上記の引用の裏に隠された意味を明らかにするには、公教育問題に関する当時の議会のあり様を説明する必要があるだろう。既述したように、1839年に発足した枢密院教育委員会は、国立師範学校創設を始めとする公教育改革を目指した。しかし、授業の一環である宗教教育問題は、英国国教会系の国民協会 (National Society) と非国教会系の内外学校協会 (British and Foreign School Society) 双方から批判され、委員会の存続そのものまで危うくなった。かろうじて、委員会の存続と視学官制度は認められたが、国立師範学校の計画は頓挫してしまう。とりわけ、国教会の主教が議席を占める上院では、カンタベリー大主教を始め主教たちは激しい批判の言葉を政府に浴びせた。その矢面に立ったのが当時国務大臣であったジョン・ラッセルである。彼は、教育局長ケイ・シャトルワースの綿密な計画をもとに忍耐強く説得に当たったが、1846年まで計画案は進展をみなかった。

一方、1846年に至り、ディケンズの貧民学校への思い入れは再び火がついたように一段とエスカレートする。同年3月28日には当時枢密院教育局長として枢密院教育委員会の裏の実力者であり、私費で教員養成のモデル校 (バターシー校) を立ち上げたこともあるケイ・シャトルワースに書簡を送っただけでなく、同年6月には、当時イギリス公教育の推進者の大立者で、この年首相の座につく「ジョン・ラッセル卿に貧民学校について一考してほしい旨の長い書簡を書き送った」(‘I had a good deal to write for Lord John Russell about the Ragged Schools.’) ことをフォースターに伝えている。「ラッセルが *The Daily News* に掲載されたディケンズの記事

に心を動かされた」¹⁶ ことをディケンズは知ったのかもしれない。ラッセルはディケンズが議会記者当時、馬車を駆って彼の地方演説を取材して以来注目していた議員であった。ラッセル宛の書簡が未発見のため、その内容が不明確だが、次に掲げるシャトルワース宛の書簡はディケンズのこの問題に対する並々ならぬ意気込みを感じさせる。

... There is no doubt that they [four ragged schools] are (almost of necessity so far) badly managed; and there is no doubt, I think, that the Union "take in" Schools, which are not, properly speaking, Ragged Schools at all.

Have you seen the School on Saffron Hill?—in West Street? That is a Ragged School.

What I want to do, before moving legislatively in the matter, is to try an experimental Normal Ragged School, on a system. It could be done, without reference to the Union, at a very small expence; and surely you and I could set one going, and ascertain, by facts and figures, and regular entries in books, what could be done in Three Months. I am sure there would be no difficulty in getting money by voluntary subscription.¹⁷

概略すればこうなろう。ディケンズは4つの学校を訪問した。それらは貧民学校とは呼べないものであり (the Union [=貧民学校連合] では認められるかもしれないが)、サフロン・ヒルの貧民学校こそ貧民学校と言うべきである。「小生は、法的な決定がなされる前に、システムに則った実験的で標準的なモデルとなる貧民学校を設立したいのです。貧民学校連合とは関係なく実施できるでしょう。経費もさしてかからないでしょう……慈善

的寄附で賄えると思います」。さらに、そのようなモデルスクールでの授業は「死ぬほど退屈で理解不可能な長ったらしい説教ではなく、……楽しく、ためになり、生徒たちの更生も期待できるでしょう」(‘the boys would not be wearied to death ... by long Pulpit discourses.... They might be amused, instructed, and in some sort reformed....’) ¹⁸ デイケンズのこの楽天的なしかし真剣な提案にシャトルワースがどのような回答を寄せたのかは未確認だが、そのようなモデル学校が設立されなかったこと、7年後シャトルワースの『公教育』(*Public Education*, 1853)を読んだデイケンズが、クーツ女史宛の書簡の中で「シャトルワース的ナンセンス」(‘Shuttleworthian nonsense’) ¹⁹ と唾棄するように切って捨てた事実を知れば自ずと肯首できよう。

シャトルワースの『公教育』はデイケンズが否定するほどナンセンスな著作ではない。その著書は、シャトルワースが中心となって枢密院教育委員会が1839年以来進めてきた公教育制度(とりわけ、師範学校制度、視学官制度を導入したことが画期的と言われる)成立に至るまでの経緯の詳細な記録である。この制度は1846年に承認されたが、シャトルワースはその間に発生した問題点、中でも障害となった宗教界に対して激しい言葉を投げかけている。国教会派(国民協会)は、「国教会への政府の服従」、「教育に関する国教会の真正な使命」、「宗教教育と世俗教育の不可分離」、「国教会派学校からの非国教徒の放逐」を唱えていた。一方、非国教徒は、「絶えず市民権の保護を要求してきたことを忘却して、教育に対する市民権の関与を拒否して、純粹に宗教的なものと、主として世俗的なものとを混同した。彼らこそ学校は教会ではないと宣言すべきであり、宗教の枠を越えて貧民に対する義務を自覚すべきであった」²⁰。これだけでも、シャトルワースたちの苦悩を推し量ることができよう。また、デイケンズを悩ましたという詳細な「表や統計」は重要な資料である。デイケンズの非難

は的を射ていないと考えるべきである。

いずれにせよ、ディケンズの以上のような一連の訴えは成功せず、ディケンズはほどなくして貧民学校問題から直接的な運動を一時的に控えるようになる。ディケンズの努力が政府に届かなかった原因は、一つには初等教育における宗教教育の問題に対する理解の甘さにあるのではなかろうか。初等教育における宗教教育は、その柱であるとともに極めて微妙な問題であり、社会的影響力のある作家とはいえ、そう簡単に解決されるものではなかった。ディケンズの不幸はその間の事情を十分理解していなかった点と思われる。それを裏書するものとして、有力評論誌 *Edinburgh Review* への投稿を望んだディケンズに対して、編集者 Macvey Napier はこれを拒んだという事実がある。「教理問答その他の儀式書や微細な詮議立てなどの、単なる形式性の強調に反対する立場を示す勇気があるなら、貧民学校の実情を描いた教育論を寄稿しよう、とネイピアに言った」²¹ とフォースター宛の書簡にある。フォースターは、拒絶の理由を教理問答や形式的で難解な奇蹟など教会による宗教教育への「歯に衣を着せぬディケンズの率直さ」が教会関係者の怒りを買うことを Napier が恐れたためだろうと推測している。宗教教育問題はそれほどデリケートな問題だったことが分かる。

しかし、宗教教育に関するディケンズの姿勢は一貫したものであり、絶えず従来の宗教に関する教授法を批判している。1843年9月24日の Starey 宛の書簡では次のように述べている。

... it seems to me of vital importance that no persons, however well intentioned, should perplex the minds of these unfortunate creatures with religious mysteries that young people with the best advantage can but imperfectly understand. I heard a lady visitor, the night I

was among you, propounding questions in reference to the “Lamb of God” which I almost unquestionably would not suffer any one to put to my children; recollecting the immense absurdities that were suggested to my childhood by the like injudicious catechizing.²²

「十分な理解のない生徒を難解な宗教上の奇跡や謎で苦しめることをすべきではない」といい切るディケンズは、「教理問答」を中心とした宗教教育の無意味さを強調する。ディケンズの反対理由は明快である。宗教教育があまりに難解であり、何らの予備知識のない児童（中には児童とはいえない者もいるが）にとってそれは不適切であり、教授法の誤りであるというのが彼の見解である。とりわけ、ボランティア精神から教師を買って出た素人教師が貧民学校の授業、とりわけ宗教に関する授業を受け持つことの危うさをディケンズは危惧していた。彼らは、キリスト教に関して大まかな知識はあるだろうが、微妙な神学的問題についてどれだけの知識があるのか。また、それを無防備な児童生徒に教授する方法についてはほとんど配慮されていない。的はずれな過度なボランティア精神 (Evangelicalism) へのディケンズの批判がここにも現れている。

しかし、宗教教育問題は、既に触れたように、公教育問題の中で政府が長年その扱いに苦慮したものである。おいそれと解決可能な問題ではないことをラッセルもシャトルワースも十分承知していたであろう。ディケンズがいかに影響力のある作家であろうと、一社会人の要求を入れる余裕は彼らにはなかったと思われる。一方、ディケンズはこの年スイスへ旅立ち、新しい作品（『ドンビー父子』）を執筆するなど身辺も多忙となっていた。

それでも、一度時頓挫した貧民学校への関心は、三度その炎を燃え上がらせる。1850年3月から発刊が開始された*HW*、さらに*AYR*は、貧民学

校を一般社会に訴える機関として存分の機能を發揮することになるからである。

そこには、最初の訪問記にあるような悲惨な状況、宗教教育の問題、公的補助への要求等既に触れた内容も見られるが、もう一方で、教師の資格と能力についての言及が増えている。貧民学校に関する記事で最長とされる“A Sleep To Startle Us”（1852年3月13日）には、政府への要求に加えて、次のように述べられている。

It is no depreciation of the devoted people whom I found presiding here, to add, that with such assistance as a trained knowledge of the business of instruction, and sound system adjusted to the peculiar difficulties and conditions of this sphere of action, their usefulness could be increased fifty-fold in a few months.²³

確かに教師たちは職務に熱心である。しかし、「専門的な教授法の知識を持ち、教育の困難さと独特の状況に対応できる健全なシステム」に支えられるなら「50倍の効果が上がるだろう」と述べて、教師養成の重要性を強調する。

教員養成の重要性を指摘するディケンズは、国立の教師養成学校（師範学校）出身の教師像を二度にわたって作品で描いた。『辛い世』と『我らが共通の友』である。それらで描かれた教師たちは、諸般の状況を検証するとラッセルやシャトルワースが7年越しで創設した国立師範学校制度の申し子といってよい。この制度はこれまで論じてきた貧民学校と密接な関係を持つ。師範学校生徒の中には貧民学校出身者がしばしばいたからである。それは、最下層の子どもが将来 **respectable** な生活を送る1つの有力な手段であった。貧民学校で優秀な生徒と認められた場合、師範学校への

道が開かれたからである。これらの生徒は、見習生として他の生徒を指導する許可を得るとともに、空いた時間を利用して、より高度の学習に励むことができた。中には、試験をパスすることで「女王奨学生」(‘Queen’s Scholar’)として奨学金を得て師範学校で専門的な教育を受けることができた。卒業すれば、十分な給料を保障されて各地の新設の小学校へ赴任できた。『辛い世』のグラッドグラインド校の教師マクチョーカムチャイルドと『我らが共通の友』で描かれる教師ヘッドストーンは、種々の状況から上記に近い経歴を持っていると判断できる。(拙稿「ディケンズと教育——師範学校制度批判の構図」『成城文芸』194号、2005年参照)

『我らが共通の友』第2部は、「教育について」(“Of an Educational Character”)と題され、幼いチャーリー・ヘクサムが通う貧民学校の授業風景がユーモラスに描写される。この描写とField-Lane Ragged Schoolとの間の類似点をいくつか指摘できる。冒頭、教室のたたずまいについて次のような描写がある。

幼いチャーリー・ヘクサムが初めて教科書で勉強した学校は……殺風景な路地裏奥の、みじめったらしい屋根裏部屋だった。部屋の空気はむっと鼻にくる、狭いところに生徒が鯨づめ、もううるさくって秩序も何もあったものではなかった。……それは年齢制限なしの、男女共学の学校だった。男女はそれぞれ別の組に分けられ、年齢別グループについてついたてで仕切られていた。²⁴

これは、クーツ女史への書簡にあった貧民学校の教室の描写とも、また、*The Daily News*で描いた教室の様子とも一致している。教室が男女別々に分かれていることも同じである。生徒たちは「半分は眠りこんでおり、……半分はものうげな音読をつづけて」いる。「先生たちを動かしている

のはもっぱら善意だけで、教え方なぞ全く念頭になかったから、せっかくの努力も、ため息がでるような混乱を生み出しているだけだった」。善意のみで、教授法に無関心な教師たち、眠り込むか、意味もなく音読をつづける生徒たち。創作で描かれた貧民学校は「ディケンズ自身が見聞したことに基づいている」とする訳者の注釈は的を射ている。

一方、授業内容についてディケンズは、クーツ女史への書簡でも、*The Daily News*でも触れなかった事柄に言及している。「下層生活には珍しくもない悪徳をたっぷり経験ずみの若い娘が、『マージャリー嬢の冒険』といった教訓話に心を奪われ『まあ面白い!』と感想を述べるのが当然とされていた」²⁵。『マージャリー嬢の冒険』とは、『靴二つちゃん』(*Little Goody Two-Shoes*)として有名な教訓話のことである。18世紀以来繰り返し出版され、適切な児童教育のテキストとして、また子供が家庭で読むに適した本として、読みつがれたものである。「悪徳たっぷり[で]経験ずみ[の]若い娘」にとって、その話は現実の生活とかけ離れたものであり、教訓とはなりえないのだ。ディケンズの風刺の矢は予想外のところへ飛んでいる。読者の中には、ディケンズが教訓話をよしとするクルックシャンクとの間で有名な児童文学論争を起こしたことを想起した者がいたはずである。

チャーリーが学んだ貧民学校には、「助教生」(‘monitor’) ないしは「見習生」(‘pupil teacher’) としき生徒が「くたびれた子や注意散漫な子の顔を猛烈な勢いでこすりおろ」しながら、教師をサポートしている。これも、クーツへの書簡や *The Daily News* にはなかった内容である。ディケンズは、そのような生徒を「執行吏助手」(‘executioner’s assistant’) と曖昧に呼び、「助教生」なのか「見習生」なのか不明確にしている。さらに、「この慣習がいつどんな所ではじまったのか……それはどうでもよろしい」²⁶ と嘯いている。「助教生制度」(‘monitorial system’) と「見習生制度」

(‘pupil teacher system’)とは、過渡期には区別が曖昧であったが、次第に後者の制度に移行したことは、『公教育』でシャトルワースが証言している²⁷。しかし、ディケンズはそこを鮮明にしないで、読者の想像力を刺激する方を選択したと思われる。

チャーリーは、成績優秀なため「頭角を現し、このごった返しの中で教えて、このごった返しよりはましな学校へ入れてもらった」とあるように、「助教生」あるいは「見習生」として教師をサポートした。彼を見出し、「よりましな学校」へ入れた教師、ヘッドストーンは既に触れたように、師範学校出身者として *respectability* に汲々としている。彼もチャーリー同様最下層の中から、自助により師範学校出身者という安定した地位を確保することができた人物である。築き上げた社会的地位に自負心を抱く彼は、パブリック・スクール出身者ユージン・レイバーンにライバル意識を燃やす。ディケンズは、ヘッドストーンの姿を通して、新しい世代の教師像を歪曲した形で描き、彼らの「社会学的成長」²⁸を揶揄した。チャーリーは、ヘッドストーンの若き姿であり、ディケンズは、二人を通して公的に確立した教員養成制度によって誕生した教師像を世に問うた。

ディケンズにとって貧民学校の存在は、どのように捉えるべきであろうか。ただ風刺の対象としての価値しかないのだろうか。貧民学校制度は、『我らが共通の友』が発刊されて5年後には廃止の方向に向かった。若き日から情熱を燃やし続けた貧民学校を作品化したのは、最後の完成された作品のみであり、しかも、他の作品におけるような描写は少ない。フィクションの世界と現実社会のギャップを感じさせるが、反面、教員養成学校と貧民学校の社会的つながりを読者に問うディケンズの姿勢は、現実の社会的活動と一貫性を保っていると解釈できる。

付記

同時期にクーツ女史を助けて実質的にディケンズが運営した ‘the Home for Homeless Women,’ Urania Cottage に関しては別稿に譲る。

注

1. *The Daily News* (Feb. 4th, 1846), *The Nonesuch Dickens, Collected Papers* (The Nonesuch Press, 1937), Vol. 1, p. 39.
2. 宮崎孝一他訳『定本チャールズ・ディケンズの生涯』上巻、研友社、228頁。
3. Philip Collins, “Dickens and the Ragged School,” *Dickensian*, Vol. 54, 1957, p. 95.
4. 『ディケンズの生涯』、上巻、228頁。
5. 同書、227頁。
6. Collins, *op. cit.*, p. 96.
7. *The Household Words* (April 5th, 1851).
8. Graham Storey eds., *Letters of Charles Dickens*, Vol. 4 (Clarendon Press, 1981), p. 225.
9. *Ibid.*, p. 225.
10. グラスゴーのデイヴィッド・ストウの教員養成学校で行われた教授法。John Manning, *Dickens on Education* (Tront, 1959), Ch. 5参照。
11. *The Daily News* (Feb. 4th, 1846), *The Nonesuch Dickens*, Vol. 1, p. 39.
12. *Ibid.*, p. 42.
13. *Ibid.*, p. 43.
14. Collins, *op. cit.*, p. 95.
15. *The Daily News* (Feb. 4th, 1846), *The Nonesuch Dickens*, Vol. 1, p. 42.
16. Graham Storey eds., *Letters of Charles Dickens*, Vol. 4 (Clarendon Press, 1981), p. 225, fn.
17. *Ibid.*, p. 222.
18. *Ibid.*, p. 222.
19. Graham Storey eds., *op. cit.*, Vol. 6, p. 210.
20. Key-Shuttleworth, *Public Educatin* (Longman, 1853), pp. 7-11.
21. Graham Storey eds., *op. cit.*, Vol. 3, p. 573.

22. Graham Storey eds., *op. cit.*, Vol. 3, p. 573.
23. *The Household Words* (March 13th, 1852).
24. 間二郎訳『我らが共通の友』上巻、ちくま書房、2001年、421頁。
25. 同書、上巻、422頁。
26. 同書、上巻、423頁。
27. Key-Shuttleworth, *op. cit.*, pp. 76-81.
28. Paul Schlicke ed., *Oxford Companion to Dickens* (Oxford Univ. Press, 1999), p. 211.